【俳句かるた候補】

2016/5/28

	俳　句	俳 人	季 語	解　　説
あ	秋深き　隣は何を　する人ぞ	松尾芭蕉	秋(秋)	秋深まり野山が寂しく感じられ、人恋しく隣人が気になってくる。
あ	荒海や　佐渡に横とう　天の川	松尾芭蕉	天の川(秋)	荒狂う海の佐渡ヶ島の空を見ると、雄大な天の川が横たわる。
い	いくたびも　雪の深さを　尋ねけり	正岡子規	雪(冬)	病床(結核)の子規が外の雪の深さを幾度も家の人に尋ねた。
う	梅が香に　のっと日の出る　山路かな	松尾芭蕉	梅が香(春)	早春の山道歩くと、梅の香に誘われ太陽がのっと顔を出した。
う	うまそうな　雪がふわり　ふわりかな	小林一茶	雪(冬)	空からうまそうなぼたん雪がふわりふわりと降ってくる。
え	炎天の　レールまっすぐ	種田山頭火	炎天(夏)	夏の炎天下、無人駅の佇まいにまっすぐ伸びる線路の風景。
お	斧入れて　香におどろくや　冬木立	与謝蕪村	冬木立(冬)	冬枯の林で木を切ると、木の香りが漂い木の生命が感じられる。
か	柿食えば　鐘が鳴るなり　法隆寺	正岡子規	柿(秋)	法隆寺門前の茶店で柿を食べてると、鐘の音が響いてきた。
か	風吹けば　来るや隣の　鯉幟	高浜虚子	鯉幟(夏)	風が吹き、隣の鯉のぼりが我が家の上を泳いでる。
き	桐一葉　日当たりながら　落ちにけり	高浜虚子	桐一葉(秋)	静かな初秋、大きな桐一葉が日の光を受け、ひらひら落ちた。
き	菊の香や　奈良には古き　仏たち	松尾芭蕉	菊(秋)	重陽の節句、奈良の都は菊の香が幾千の古い仏を包んでいる。
く	くろがねの　秋の風鈴　鳴りにけり	飯田蛇笏	秋の風鈴(秋)	夏から吊るした風鈴が秋風に吹かれ、突然チリリリンと鳴った。
け	鶏頭の　十四五本も　ありぬべし	正岡子規	鶏頭(秋)	「庭に鶏頭が十四五本は咲いてるだろう」と、病床子規の句。
け	鶏頭や　雁の来る時　なほ赤し	松尾芭蕉	〃	鶏頭は雁来紅とも言い、雁が渡って来る頃に色が最も鮮やか。
こ	是がまあ　つひの栖か　雪五尺	小林一茶	雪(冬)	五尺の雪に埋もれたこの家が、生涯最後の住まいとなるか。
さ	五月雨や　大河を前に　家二軒	与謝蕪村	五月雨(夏)	五月雨が降続き、大河の前の家二軒が押し流されそうだ。
さ	五月雨を　集めて早し　最上川	松尾芭蕉	〃	降り続く五月雨で、最上川は水を讃え凄い勢いで流れている。
し	閑かさや　岩にしみ入る　蝉の声	松尾芭蕉	蝉の声(夏)	ひっそり静まる中、突然鳴出した蝉の声が岩にしみ入る様だ。
す	雀の子　そこのけそこのけ　お馬が通る	小林一茶	雀の子(春)	道に遊んでいる雀の子、お馬が通るから、どうかのいてくれ。
す	涼しさや　鐘をはなるる　かねの声	与謝蕪村	涼しさ(夏)	夏の朝、夜明けの鐘が四方に広がる様子を「離るる」と詠む。
せ	咳をしても　一人	尾崎放哉	咳(冬)	僅か九音、俳句という最短詩型を極めた作品。
そ	そのままよ　月もたのまじ　伊吹山	松尾芭蕉	月(秋)	伊吹山は辺りを制し、秋の月も不要なほど毅然とした姿だ。
た	旅に病んで　夢は枯野を　かけめぐる	松尾芭蕉	枯野(冬)	旅の中、病に伏しても、夢の中では心が枯野を駆け巡っている。
た	痰一斗　糸瓜の水も　間に合わず	正岡子規	糸瓜(秋)	六年余りの病床生活を重ねた子規の最後の句となる。
ち	跳躍台　人なしプール　真青なり	水原秋桜子	プール(夏)	試合前の飛込み台に人影がなく、深いプールの水は真っ青だ。
つ	梅雨晴れや　ところどころに　蟻の道	正岡子規	梅雨晴(夏)	空を見て地面を見たら、蟻が水溜りの合間で列を作っていた。
つ	月いづく　鐘は沈める　海の底	松尾芭蕉	月(秋)	新田義貞が足利氏に破れ、敦賀金ヶ崎に軍艦を沈めたもの。
て	天よりも　かがやくものは　蝶の翅	山口誓子	蝶(春)	蝶の翅の鱗粉が光を反射し、様々な色に輝き崇高な美しさだ。
て	天秤や　京江戸かけて　千代の春	松尾芭蕉	春(春)	京と江戸どちらがより栄えているか、兎に角目出度い新春だ。
と	鳥羽殿へ　五六騎いそぐ　野分かな	与謝蕪村	野分(秋)	野分が吹き荒れ、五、六騎の若武者が鳥羽殿へ駆け抜ける。
と	遠山に　日のあたりたる　枯野かな	高浜虚子	枯野(冬)	日が傾き寒々した枯野の遠い山に夕日が当って明るい。
な	菜の花や　月は東に　日は西に	与謝蕪村	菜の花(春)	見渡す限りの菜の花畑、月が東に上り、日は西に沈んでいる。
な	夏草や　兵どもが　夢のあと	松尾芭蕉	夏草(夏)	義経や藤原氏が戦った夢の跡に、ただ夏草が茂っている。
に	西吹かば　東にたまる　落ち葉かな	与謝蕪村	落ち葉(冬)	西風が吹くと、西の葉が落ち、東にふかふかの落葉がたまる。
に	庭掃きて　雪を忘るる　帚かな	松尾芭蕉	雪(冬)	雪の朝、僧寒山が箒で雪を掃きながら、雪の存在を忘れてる。
ぬ	盗人に　逢うた夜もあり　年の暮れ	松尾芭蕉	年の暮れ(冬)	この一年を振り返れば、、私も盗人に入られたことがあった。□
ね	猫の子の ちょいと押さえる 木の葉かな	小林一茶	子猫(春)	舞い落ちてきた木の葉を子猫がチョイと押さえた可愛い情景。
の	のどけさや　浅間のけぶり　昼の月	小林一茶	のどか(春)	長い春の日のゆったりした浅間山の煙と昼の月の情景を描く。
の	野ざらしを　心の風の　しむ身哉	松尾芭蕉	野ざらし(秋)	旅に出る思いが並々ならず、旅の標題を「野ざらし」とする。
は	春の海　ひねもすのたり　のたりかな	与謝蕪村	春の海(春)	春の海は一日中ゆったりとうねり、誠にのどかなことだ。
は	初時雨　猿も小蓑を　ほしげなり	松尾芭蕉	初時雨(冬)	山中で時雨にぬれる猿の姿は、小さい蓑をほしがってる様だ。
ひ	ひっぱれる　糸まっすぐや　甲虫	高野素十	甲虫(夏)	甲虫の角に糸を繋ぐと甲虫が這い出し一直線にぴんと張った。
ひ	昼からは　ちと影もあり　雲の峰	小林一茶	雲の峰(夏)	太陽が雲の峰に隠れ、強い日差しがふと緩み、涼しくなった。
ふ	古池や　蛙とびこむ　水の音	松尾芭蕉	蛙(春)	古池に蛙が飛込み、一瞬静けさを破り、もとの静けさに戻った。
ふ	降る雪や　明治は遠く　なりにけり	中村草田男	雪(冬)	時間は容赦なく流れ、戻ることがない明治への感懐を詠む。
へ	糸瓜咲て　痰のつまりし　仏かな	正岡子規	糸瓜(秋)	病で命途絶えようとしている自分を冷静に客観視したもの。
へ	蛇食ふと　聞けばおそろし　雉子の声	松尾芭蕉	雉子(春)	蛇まで食うと聞けば、きじの声にロマンを感じるのは如何か？
ほ	ほろほろと　山吹散るか　滝の音	松尾芭蕉	山吹(春)	轟々と音する滝に合せ、山吹の花びらがほろほろと散った。
ほ	牡丹散って　うち重なりぬ　二三片	与謝蕪村	ぼたん(夏)	牡丹の花も散り始め、黒い土に二、三片の花びらを重ねた。
ま	松山や　秋より高き　天主閣	正岡子規	秋より(秋)	松山城天主閣は澄み切った突き抜ける秋の空よりも高い。
み	三日月や　ふわりと梅に　鶯が	小林一茶	鶯(春)	日没の三日月に、鶯が休もうと梅の枝にふわり戻ってきた。
み	水無月や　鯛はあれども　塩鯨	松尾芭蕉	水無月(夏)	7月は鯛が旬だが、私は庶民の夏の大衆食品の塩鯨がよい。
む	むざんやな　甲の下の　きりぎりす	松尾芭蕉	きりぎりす(秋)	実盛の形見の兜の下でこおろぎが鳴き、秋の哀れを誘ってる。
め	目には青葉　山ほととぎす　初かつほ	山口素堂	季重なり(夏)	夏近し、周囲が若葉に染まり、山不如帰が鳴き、初鰹が新鮮。
め	名月や　池をめぐりて　夜もすがら	松尾芭蕉	名月(秋)	池に映る名月に心奪われ、池の廻りを歩きつつ一夜を過した。
も	もりもり　盛り上がる　雲へ歩む	種田山頭火	雲(夏)	もりもりと盛り上がる入道雲、命が絶えたら天空に歩んでいくぞ。
も	物いへば　唇寒し　秋の風	松尾芭蕉	秋の風(秋)	安易に人を批判せずに、相手の気持を汲んだ発信をしよう。
や	やれ打つな　蝿が手をすり　足をする	小林一茶	はえ(夏)	あの様にはえが手足合せ命乞いしてる。可哀想だ打たないで。
や	山路来て　何やらゆかし　すみれ草	松尾芭蕉	すみれ草(春)	春の山道の片端にふと目をやると小さなすみれが咲いていた。
ゆ	行く春や　鳥啼魚の　目は泪	松尾芭蕉	行く春(春)	過ぎゆく春を鳥や魚に託し、親しい人々との別れを惜しむ。
ゆ	雪とけて　村いっぱいの　子どもかな	小林一茶	雪とけて(春)	春に雪がとけ、家々から子供たちが一斉に飛び出し遊び回る。
よ	よく見れば　なずな花咲く　垣根かな	松尾芭蕉	なずな(春)	めだたない春のなずなが垣根の陽だまりで可憐に咲いてる。
ら	蘭の香や　菊より暗き　ほとりより	与謝蕪村	蘭の香(秋)	菊の花より暗い辺りから、妖艶な蘭の香りが漂ってきた。
ら	蘭の香や　蝶のつばさに　たき物す	松尾芭蕉	蘭(秋)	茶店の女の白い着物を蝶の羽に見立て、蘭の芳香に譬えた。
り	流氷や　宗谷の門波　荒れやまず	山口誓子	流氷(春)	少年時代に過ごした厳寒地の宗谷を思い出し、発句したもの。
り	龍宮も　今日の潮路や　土用干	松尾芭蕉	潮路(春)	春の大潮が引き、竜宮城ではこの機に土用干しをしてるだろう。
る	瑠璃色の　地球も花も　宇宙の子	山崎直子	花(春)	宇宙飛行士の山崎直子が宇宙から眺めた地球を俳句に詠む。
れ	蓮花草　我も一度は　子供なり	正岡子規	蓮花草(春)	子規が、「我も一度は子供なり」と居直った表現が面白い。
ろ	六月や　峰に雲置く　嵐山	松尾芭蕉	六月(夏)	嵐山に入道雲がもくもく力強さを感じ、夏景色もいいものだ。
わ	我と来て　遊べや　親のない雀	小林一茶	雀の子(春)	親のない子雀よ、寂しさは私も同じだ。一緒に遊ぼじゃないか。
わ	若あゆの　二手になりて　のぼりけり	正岡子規	若あゆ(春)	流れの速い瀬を若あゆが二手に分かれて、のぼっていくよ。
を	をとゝひの　へちまの水も　取らざりき	正岡子規	へちま(秋)	病床の子規が死期を悟り、母/妹/高浜虚子を呼び詠んだ句。

俳句かるた候補 72 （芭蕉 29、蕪村 9、一茶 10、子規 10、その他 14）
俳句かるた選出 45 （芭蕉 12、蕪村 7、一茶 7、子規 8、その他 11）